
灰色の翼

白雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色の翼

【Nコード】

N1807F

【作者名】

白雨

【あらすじ】

謎の虚無によって縁取られた大陸ブルティア。その正体が明らかされたとき、大陸の自由を求めて3人の若者の壮大な旅が始まる。

第一部：ブルティア 第一話：五本の川

大きな五本の川によって五つの国に分けられた大陸　ブルティア。その広大な土地の半分以上は様々な種類の木が自生する大きな森林に覆われていて、他の2割は川や湖、残りの3割の部分は開けていて、そこに人々が居住している。

大陸の最北端から南に向かってほぼまっすぐに流れるのはノーザ川。閑静さを保ちながら急な山を駆け下りてくるこの川の水は、他のどの川の水よりも透き通っていて、軟らかく、魚たちのみならずブルティアに住んでいる者たちはみな好んでいる。また、蒼白とも白ともとれる小さく美しい花（ノーザホワイトと呼ばれている）がこの川の周辺に限って観察できる。淡く光を反射させながら、つま先から徐々に鼻腔へと這うように漂ってくる甘い香り。毎日耕作に勤しむ者たちも、あるいは南東の国の王でさえも花々に劣らず美しい王妃を連れてそこをしばしば訪れる。

「やや北西よりの西から流れる」最も噂の多い川「ウェスタ川といえば、ノーザ川ほどではないものの大変水が澄んでいて綺麗であるのだが、不思議なことに殆ど魚が住んでいないのだ。ある国では、「南西の国がウェスタ川の上流で密かに魚を獲り尽しているに違いない」だとか、また他のある国では、「北東の国が我々を飢餓に追い込んで破滅させるために川に毒を盛つてるに違いない」とまで言われている。

この二つの川に加え、東からしなやかなカーブを描きながら流れるタスイ川が大陸の真ん中で合流し、大きな湖　セントラル湖をつくっている。

この湖は何といっても魚の量にも種類にも富んでいて（このことからウェスタ川に毒が盛られているという噂は、本当に単なる噂であることがわかる。魚をほぼ絶滅させるほどの毒に侵された川が注がれている湖に、これほど多くの魚が平気で、むしろ悠々と生きて

いけるとはいささか思えない。(釣りで大変に有名だ。早朝などは多くの老若男女で賑わうのが常である。その人気ぶりといえ、ここで貸しボート・釣り具業を一人で独占している男がブルティアの大富豪十人の内の一人に数えられるほどだ。

セントラル湖の丁度真ん中あたりには、小さな島があるがこれはどの国にも属していない。特別に素晴らしい環境であるとか、珍しい生物が観察できるとか、シンボルとなるような建物があるとか、人々の興味をひくものが全くないので、その島を訪れる人は滅多にいないのである。そんなわけで、困ったことにどの国も魅力のない島の管理をしたがらない。

ところで、残り二本の川の紹介をするのと同時に、そろそろこの大陸の最大の謎にも触れておきたい。その二本の川というのがセントラル湖から南西へと流れるセイナ川と、南東へと流れるエーエス川なのだが、その二本が流れ着く先はというと……それは決して海ではないのである。そもそもブルティアに”海”というものはどこにもなく、もちろん言葉すら存在しない。では、この大陸の”端”には一体何があるのか……かなりおかしい話だが、それが全く謎なのだ。強いて言うならば、何も無い。ただただ虚無が広がるばかりなのである。

セイナ川とエーエス側は絶えず大量の水をこの虚無に注ぎ続け、東から西へ気持ちよく駆け抜ける風も虚無へと吸い込まれてゆく。ひとたびあなたがこの、完全な暗闇であり周りから一切の音を奪っている虚無に”近づき過ぎてみる”ならば、ただちに五感の全てを奪われ、やがてあなたは思考を働かせることすら、そのやり方を完全に忘れてしまったかのようにただただ虚無に向かって立ち続けることになるだろう。その後あなたがどうなるか……運がよければ巡回している兵士に見つかり助け出されるだろうが、もし誰にも気づかれなければ……それは敢えて言うことでもないだろう。

この虚無の正体については多くの説がある。単純なものから挙げ

ると、「単なる端説」 世界には必ず端があるはず。虚無は単なる世界の端なのだ、と言うかなり昔から信じられている仮説である。しかし今となつてはこの説を信じる人はそう多くない。教養のない者か、人とあまりかかわりを持たず、噂には耳を傾けないものか、世界の端のことに興味はなく生計をたてることだけに必死になつてゐる者くらいなものだ。

「単なる端説」を大きく翻すこととなつた「異世界説」は、今日のブルテティアにおいて最も多くの人々が信じている説であり、現在虚無に行われてゐる調査も全てこの説を前提に行われてゐる。この説はいくつかの事例を元に各国の有名な科学者たちが論争に論争（この論争というのが大抵ただの罵倒のしあいになつていて、それはそれは酷いものだった。）を重ねて出された説なのだが、その内容を簡単に言つてしまえば、「虚無の向こう側にはブルテティアとは違つて世界が広がつてゐる」といふ誰かが一度は脳裏に不鮮明ながらも描いただろう、至極簡単なものだ。しかしこの説が現在のようによくの人々に信じられるに至るには、各国の多大なる努力が不可欠だった。時には犠牲者も。一度だけ、一人の兵士に無線を持たせ、遠隔操作で動く荷台のようなものに彼を乗せ、途中で落ちたりしないように下半身をベルトで土台に固定し、それに大陸の端からセントラル湖までの距離をはかるのではないかと思われたほど長いロープをくりつけ、虚無の中を進ませる、という計画がなされた。前述したように、虚無に近づきすぎれば”行動する”という概念がその者から奪われる。しかし、ブルテティアにも”終わり”があつたように虚無にもそれがあるならば、虚無から出た先で彼は意識を取り戻し、無線でその歓喜を仲間たちに伝えてくれるだろうと予想された。荷台には彼に絶えず栄養を補給し続ける点滴も取り付けられ、かなりの長旅もできるようにした。同伴していた科学者が遠隔作用のリモコンのスイッチを押す。彼を乗せ、ロープをくりつけられた荷台はゆっくりと暗闇に呑み込まれる準備を始める。彼が振り返りながら仲間たちに手を振つてゐる間に、彼の姿は誰か

らも見えなくなった。

サーッと静かにロープが地面を擦る音だけが微かに聞こえる。科学者がリモコンのスイッチを切ってもその音はやまなかった。誰もが直ちに異変を感じ、慌てて無線で彼の安否を確かめようとする。が、何度呼びかけても彼が応答することはなかった。無線による一方的な会話はそれでも続く。ロープがあと数百mにもなったところで、兵士の一人がおもむろにそのロープを掴んだ。するととても簡単にロープはそれまで2日間近く繰り返し返してきた動きを止めた。すかさず手繰り寄せる。ロープはその兵士に身を委ねたかのようにどンドンこちらへを戻ってきた。それを見た他の兵士たちも、ずっとリモコンに釘付けになっていた科学者もロープを手繰り寄せるのに加わり、ついにはその場にいた全員が一丸となって無心にロープを引き続けた。

もう何時間経ったかわからない。あまりに軽すぎるロープを引き続けることに誰も疲れ果てることはなかったが、一瞬でも不安を忘れたものはいなかった。そしてついに、先頭でロープを引く兵士が荷台の後部であるバッテリーの姿を確認した。歓喜の声があがる。しかしすぐに虚無はいつもの静けさを取り戻した。丸2日間と半日以上虚無を旅を終え、再びブルティアの兵士たちにその姿を見せた荷台の上に、彼は座っていないかった。途中で落ちたのか……兵士たちがそう落胆しているときも、科学者は残酷なまでに冷静だった。

「ベルトが刃物で切断されている。」

科学者の言葉は虚無に吸い込まれることなく、その場にこたました。

第二話：五つの国

ブルティアの国々についての話しに移ろう。まずは北西の国、ノリス家が代々統治しているノリス国。西からの清らかな風と、国の東西にある森林に多く自生する果樹、そしてノーザ川の恵みによってこの国は大変潤っている。”飢え”という言葉を聞く機会のないこの国に亡命しようとする者があとを絶たないのだが、この国は決して彼らを受け入れない。なぜならば国民の殆どがノリス国民がブルティアで最も気高いと強く信じていて、その高貴な血が他の国の者によつて穢されるのがどうしても許せないのだ。昔、正式に移住してきた他の国の商人がノリス国の女性と結婚しその子供とともに国内の小さな村で暮らしていたのだが、ある日一家諸共惨殺され、その遺体はノリス城の壁に吊るされ、晒された…という残酷な事件があった。それでも密かにこの国に入ろうとするものはやはり多く、国境である川沿いには常にノリス国軍兵士たちが風以外の何者も通さぬようその青く鋭い目を光らせている。

そんなノリス国に亡命しようとする者が最も多いのが西の国、ノリス国とはウエスタ川を挟んで隣国となるイン・サーロ国である。現在は獣と人間を足して二で割ったような風貌の大男、ミノ「カ」ビル将軍がその権威をふるっており他国から見れば”史上最悪”と言われる状態が続いている。この国では繰り返された無謀な農法や元々の環境のせいもあり、大地は荒果て一部の土地を除いては耕作はできず、前述したようにウエスタ川には毒が流れているとの噂のため飲み水として利用する人は少なく、魚も獲れない。たのみのエーエス川といえば、その水は飲むことが出来るものの、セントラル湖にとどまる魚達が多く、さらにそれらの多くは獲られてしまった。めここでも食糧はあまり期待できないのだ。”飢え”が空気に溶け込んでいるかのように蔓延しているこの国の人々が生き残るために

は、亡命をするか、他の国から食糧を略奪するしかない。繰り返される戦争の中で多くの食糧を勝ち取り、さらには他の国の領土の半分までを得たことがきっかけとなり、ミノカビルは多くの支持者を得て今の地位を得たのだ。ミノカビルがまだ、現在のように全ての国民を手玉にとれるようになる前は、彼は得た食糧を国民にもわけあたえていたのだが、最近では自分を優先にして、国軍兵士のみ与えるということを宣言している。そのために今では国民の9割以上は厳しい訓練にも嘆かず、国軍兵士として働き、残りわずかな穀物と狩猟で得た肉を糧にして辛うじて生活している。

現在ミノカビル軍からの攻撃を受けているのはベジル国。既にこの国の西半分はイン・サーロ国の植民地と化し、ベジル国の真面目な国民たちが奴隷のように扱われ、無理やりに長時間の肉体労働をさせられている。こんな状況の中でもベジル国王の武力による抵抗をせず、“和解”することのみを求めている。この国は古くから宗教が主体の国家で、暴力はタブーとされているため、自国軍も所有していない。恵まれた環境とは言えないが、貧しいながらも飢えをしのぎながら生活するには十分な食糧を得ることが出来る。しかしミノカビルが狙っているのは食糧でもか弱い民たちでもない。この国の一番東にある小さな集落に住んでいる人々。水と風の民と呼ばれるウイズ族を手に入れたいのだ。彼らはベジル国に所属しながらもその思想や生活様式は全く独自のもので、ウイズ族以外の人々との交流は全くない。全くない、と言ったが、実は一度だけあった。ミノカビルがまだただの一将軍であったときのことである。イン・サーロ国軍がベジル国の何にも手を出さず、国の中心を堂々と通り、どこかへ向かっている姿が確認された。ノリス国を除くほかの国々はイン・サーロ国がウイズ族の集落に向かっているということを見抜き、速やかに小隊をウイズ族の集落に駐在させ、彼らを守りきったのだ。守りきった、と言ってもそれは殆どウイズ族の力のおかげだった。彼らの誰もが他の普通の人の数十

倍も強力な魔法を使え、おまけに周りにある水や風を自由に操ることが出来るのだ。巨大な水柱によって中に放り出されたミノ「カ」ビルはその時からこの集落の民を手に入れることに尽力している。

東に位置するアキード国はブルティア最大の商工業国である。建築や金融業、あるいは衣類や食器といった生活用品の販売まで他の国々や自国民を相手に展開しているが、アキードで最も有名なのはなんとといっても軍需産業である。アキード国王のディザルは表向きにはイン・サー口国への武器の販売を禁止しているが、イン・サー口国に武器がなくなると、戦争の火種がなくなり武器が全く売れなくなってしまうので、裏ではむしろイン・サー口国に多く提供している。ディザルはかなりの野心家で、ウィズ族がイン・サー口軍に攻めされたときに小隊を送り、協力的な顔をして外交をしているが、彼の本当の目的はブルティア大陸を全て自分のものにするのである。特に彼はノリス国の美しさに完全に心を奪われており、一国も早く手に入れたいため、密かに大量のスパイを送り込んでいる。

そして最後に北東の国、ブルティア大陸の警察とも呼ばれているフローズ国が、このお話のメインとなる3人の若者が生活をしている国である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1807f/>

灰色の翼

2010年10月28日04時16分発行